

第七十八日目

師 範:アメリカは第一次世界大戦のときには国内は戦場にならず、経済は活発になり、拡大して、世界一豊かな国になりました。



繁栄につぐ繁栄で、この国には失業とか貧乏という言葉はなくなる、とまで言われていました。

自動車や電化製品や高層ビルがシンボルとなっていました。

そのアメリカが突然に株価大暴落におちいり、いっぺんに景気は後退し、パニックになりました。

世界貿易や金融の中心だったアメリカの不況は各国に広まりました。

1929年 世界恐慌がおこる。

この年を覚えましょう。

コン太:これはかんたんです。



「特に苦しかった世界恐慌」

です。「とくに」は192、「く(るしかった)」は9です。

「恐慌が 世界を特に 苦しめる」

というのもできました。

師 範:自信作ですね。

むだのない言い回しですが、ようすが伝わります。

ペン太:では



「ここ一番苦肉の策もない世界恐慌」

「いちばん」は1、「くにく」は929です。

長くなりました。

師 範:コン太君の作品がなければ、この作品もよいのですが。

このころの動きは、20世紀のことであることは、まちがえないでしょうから、1900のところを省略してもいいようですね。

ペン太:そうならば

「にくい世界恐慌」

「福が消えて株価暴落」

などができます。